テイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー３　～龍は閃光のように・・・～

颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー３　～龍は閃光のように・・・～

【Ｎコード】
Ｎ９９６８Ｚ

【作者名】
颯

【あらすじ】
世界中の守り手、‘ディセンダー’太古より予言されていたそれは、世界を守護するために現れる・・・
「世界樹」とその「世界樹が生み出したとされる星晶」というエネルギー鉱物で発展を続ける世界、ルミナシア
しかし、星晶の力で産業が発展する国々がある一方で、それらの国から植民地化を強要されたり、恵みを奪われる国もありました・・・

空を駆ける船、バンエルティア号を拠点に活動するギルド「アドリビトム」の面々は、そういった恵みを奪われる人々を助けるために活動をしています。

ある日、アドリビトムに所属する少女カノンノは、空から落ちてきた主人公カイトと、光の中から現れたシュウ・・・彼等には自分の名前以外の記憶がなく、目的もわかりません。
行く当てのないかれらはカノンノに連れられ、アドリビトムに入ります。

新たなレディアントマイソロジーをお楽しみください。

プロローグ　始まり

？？？

『ゴオォォアワァァァァァッ！！！』

４本の足に翼を生やした赤い竜の咆哮が・・・・この場所に響き渡った・・・・

たくましかった翼はボロボロでもう空も飛べない・・・・角は半ばころから折れ、前両足と右後ろ足は爪が折れ、尻尾は切断されていて、もう戦えるような状態ではない・・・

？？？

「こんなものか・・・・太古の世界・・・・ルミナシア一の力をもったドラゴンといってもこの程度・・・・」

その竜をこのような姿まで追い込んだ・・・いや、まるで玩具の様に遊んだ人・・・・いや人ではない。体には水晶のようなものをたくさんつけ、髪の色は白く毛先だけが青い・・・左目は大きな貝で覆い尽くされ、右頭部には螺旋状に渦巻く貝がついている。

？？？

「とどめだ・・・世界創造のメルト！！」

彼を中心に花のような魔方陣のようなものが展開され炎、氷、雷等の連続の攻撃が竜を襲った・・・

『ガアアアァァァァァァァッ！！？』

竜は攻撃をたてつづけに受け、吹きとんだ。

そして壁であろう部分に叩きつけられ、その壁が破壊した・・・・

どうやらこの場所は高いところにあるようだ・・・ピクリとも動かず海面へと落下していった。

???

「・・・仕留め損ねたか・・・・・まぁいいだろう、この高さだ・・・・・海面にたたきつけられて死ぬだろう。」

そうして彼は闇へと消えていった・・・・

プロローグ　落下

三人称ｓｉｄｅ

カノンノ
「今日は世界樹がよく見えるね・・・」

ピンクの髪のかわいらしい少女がたずねる。

ロックス
「ええ。何かいいことがあるかもしれませんね。」

空を2枚の羽を器用に使って飛んでいる小さな生物が答えた。

カノンノ
「うん。」

ロックス
「ん？あれは・・・」

カノンノ
「どうしたの？ロックス」

ロックス
「いえ・・・あれはいったい・・・」

ロックスが見ていたほうにカノンノは向くそのには・・・

？？？

「うわぁあああぁぁぁ」

カノンノ
「ん？ってあれ人？」

ロックス
「こっちに落ちてきています！！」

カノンノ
「キャアァアア！！」

『ドスン・・・・』

仰向けになって落ちてきたのは少年だった・・・まずはじめに目に入ったのは髪色・・・まるですべてを燃やすような・・・でもどこかに冷たさを覚える蒼い髪・・・服は黒いジーパンに白のシャツ、そのうえに赤と黒のチャックの服を羽織って、そのうえに黒のフード付のロングコートを着ていた・・・そして背中には見たこともないような剣が提げられていた。

カノンノ
「・・・ロ、ロックス。急いで医務室に連れて行くよ。」

ロックス
「か、かしこまりました。」

数時間後

???

「・・・っう・・・くう。ウワァァァァァ！！」

カノンノ

「キャア！」

???

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ここはどこだ？」

アニー

「あ、ようやく目が覚めたのね。ここは医務室ですよ・・・展望台で倒れていたあなたを見つけてここで治療していたの。」

???

「あ、ありがとう。」

アニー

「お礼なら今あなたの奇声に驚いたこの子に言ってちょうだい。倒れていたあなたをここまで運んでくれたの。」

???

「え？あ、ごめん。君が俺を？」

カノンノ

「うん。私の名前はカノンノ。カノンノ・グラスバレーよ。あなたは？」

カイト
「俺はカイト、カイト・バナージ。さっきはありがとうな。」

カノンノ
「ううん。気にしないで。」

そんな会話をしているとアニーが、

アニー
「あなた、すごい怪我をしていたのよ？しかも空から落ちてくるし・・・」

カイト
「空から？怪我・・・って本当だ。」

突然青い髪の女の人が入ってきた。

アンジュ
「あら？目が覚めたのね？私はアンジュ、この船のリーダーをしているわ。」

ロックス
「僕はこの船でコンシェルジュで、ロックスプリングスと申します。ロックスとお呼び下さい」

アニー
「あら。申し後れました。私は医務室でお手伝いさせていただいています、アニー・バースと申します。」

カイト
「俺はカイト・バナージだ。」

アンジュ
「ところであなた何者？空から落ちてきたってのも気になるし・・・」

カイト
「え？俺は・・・あれ、俺は・・・・・」

アンジュ
「？どうしたの。」

カノンノ
「もしかして記憶が・・・」

カイト
「ああ・・・みたいだ・・・何も思い出せない。」

アンジュ
「そう。なら仕方ないわね。記憶の無い状態でどこかの街に出したら、それこそ危険ですもの」

アンジュは少し考える仕草を見せると何か思い付いたようにカイトへと向いた。

アンジュ
「・・・そうね。なら、記憶が戻るまでこのギルドで働かない？働いてさえくれれば、ちゃんと衣食住ついた待遇をするわよ」

カイト
「ギルド？」

アンジュの言葉にここにいた全員が驚く。

アンジュ
「ええ。いろいろなギルドがあるけど、ここのギルドは、人を助けるのを目的としたギルドよ。」

カイト
「俺が・・・人を・・・・助ける・・・・・・」

アンジュ
「そう。」

カイトが下を向いて考えているとカノンノが元気そうにカイトに迫ってきた。

カノンノ
「そうだよ。一緒に働かない？まぁここに入るために入団テストみたいのもあるけど、私も手伝うからさ。」

カイト
「カノンノさん・・・うん、わかった・・・アンジュさん。いますぐに試験をお願いします。」

アンジュ
「だめ。」

カイト

「うり？」

アンジュ

「あなたそんな体で試験受ける気？試験は後日よ。今日はゆっくりねむりなさい。」

カイト

「あ、はい。」

アンジュ

「それじゃあみんな、戻るわよ。」

そういいながら、アンジュを先頭にカノンノ以外は医務室を後にした。

そうしてカノンノはというと・・・

カノンノ

「ねぇカイト君。見て欲しい物があるんだけど。」

カイト

「見て欲しいもの？」

カノンノ

「うん。これ・・・」

カノンノはおそらく自分が書いたであろう絵をカイトに見せてきた。

カイト

「これ・・・どこかで・・・・・見たことがある。」

カノンノ
「え？」

カイト
「カノンノさん。これをどこで？」

カノンノはあわてた表情で答える。

カノンノ
「え？えっと・・・それは、た、たまに頭のなかにみたこともないような光景が広がって、その見え
た風景を筆でなぞって、書いたのがこれらの絵なの・・・でもこれを見たことがあるって言う人はカ
イト君が初めて・・・」

そのカノンノの表情はどこかうれしそうなものがあった。

カイト
「どうした？」

カノンノ
「え？・・・他の人にも見せたけど、誰もこの風景を知らないの。それに、作り話でしょって、笑われちゃうの・・・」

カイト
「・・・作り話じゃねえよ。」

カノンノ

「え？」

カイト
「絶対ににこの場所見つけて、カノンノさんは嘘を言ってないって証明してやるよ・・・それにこれは見たことがある気がする。だから心配するな・・・」

カノンノ
「あ、ありがとう。カイト君。」

カイト
「あ、あと、カイト君じゃなくてカイトって呼んでくれないか？」

カノンノ
「え？どうして？」

カイト
「ん～何でだろ・・・呼び捨てで呼ばれたいのかな・・・それとも記憶があったころはカイトって呼ばれていたのかも。」

カノンノ
「・・・うん。わかった。その代わり私もカノンノって呼んで？」

カイト
「・・・わかった。あらためてよろしく。カノンノ。」

カノンノ
「うん。こちらこそ。カイト。」

いまここに、龍の騎士と光の騎士とカノンノたちの物語が始まる。

第1話：試験

カイトｓｉｄｅ

アンジュ
「それでは最終試験の内容を発表します。」

俺はこれまで採掘、採取などの試験をやってきたが、魔物と戦う機会はなかった・・・おそらく何かの討伐だと思う・・・

アンジュ
「ガルーダをカノンノと一緒に討伐してもらいます。」

カイト
「ガルーダ？」

カノンノ
「空を飛んでいる、鷹みたいな魔物だよ。このギルドに入る際には、みんな討伐しているんだよ？」

カイト
「うおっ。カノンノ？・・・ビックリした。いつの間に？」

カノンノ
「今。」

あ～そういえばアンジュさんがなんか言ってたな。カノンノがくるって・・・

カノンノ
「なに？その不満そうな顔・・・」

カイト
「いや？別に・・・」

アンジュ
「ンン！！それではちゃちゃっと終わらせてね。カノンノは討伐の報告をお願いね」

カノンノ
「はい。」

咳払い下手！！つか俺が討伐したこと前提で話し進めるなよ。

カノンノ
「行くよ？カイト。」

カイト
「ああ。」

アンジュ
「あら。忘れていたわ。はいこれ。アップルグミとオレンジグミよ。３つずつ入っているから。」

カイト
「・・・なぜグミ？」

アンジュ
「そんなことも忘れたの？このグミは、体力回復もあるのよ。」

知らなかった。

アンジュ
「それじゃあがんばってね。」

カイト
「ああ。まかせろ。」

ルパープ連山

ルパープ連山につくと目の前にオタオタがいた。俺は背中にある剣を取り出した。

カイト
「俺が前にいく。後方支援よろしく。」

カノンノ
「うん。いくよ。」

カイト
「ッハ！！」

俺は剣を振り上げ、振り下ろした。俺の剣は深くオタオタへと食い込み、オタオタは怯んだ。

カイト

「襲爪雷斬！！」

オタオタは塵となって消えた。

カイト
「次！！」

カノンノ
「ライトニング！！」

俺がもう1体のオタオタの方へいこうとすると、カノンノが1発でオタオタを倒した。

カノンノ
「チェンジ！！」

カイト
「ああ。」

俺たちは前と後ろを入れ替わる、これは俺たちがここに来る前に決めたことで掛け声に合わせて、前後衛入れ替わって、戦闘の負担を和らげるというものだ。

カイト
「詠唱に入る。フォローを頼む。」

カノンノ
「分かった。獅子戦吼！！」

カノンノの膝から獅子のオーラが飛びでて、オタオタは2匹とも

ダウンした。

カイト
「下がれ！！ヒャダルコ！！」

地面から氷が飛び出しオタオタは消えた。

カノンノ
「ナイス、カイト。でもさっきの術何？見たこともなかったけど・・・」

カイト
「記憶喪失の俺に聞くなよ。って・・・ガルーダってあれ？」

カノンノ
「え？」

見るとそこには、ガルーダと思われる魔物が４体いた。

カノンノ
「嘘・・・なんで・・・いつもは１体だけなのに・・・」

マジかよ！！ってことはなに？俺だけ難易度高いじゃん。・・・
でも

カイト
「ちょうどいい。オタオタじゃあ飽きてきたところだ。頼むぞ。
カノンノ。」

カノンノ

「カイト・・・うん。行くよ！！」

カイト
「ああ。」

それを合図に俺は駆け抜けた、すぐさま3連撃を繰り出し、

カイト
「虎牙破斬！！秋沙雨！！鳳凰天駆！！」

ガルーダを切り上げ振り下ろしの連撃、連続で突き自分ごと切り上げ、炎を纏って空中から突撃する。

4体いるガルーダの1体は消えた。

残り3体。そう思った矢先、残りのうち2体は俺の方へ、もう1体はカノンノのほうへ向かった。

カイト
「守護方陣！！」

カノンノ
「虎牙破斬！！虎牙連斬！！」

カイト
「魔神剣！！」

各々が技をだし、下がる。

カイト

「ラナリオン！！」

俺は雷雲を魔力で作り出した。

その俺の意図をつかんだのか、カノンノも詠唱を開始する。

そしてガルーダは3体が同じところに集まった。

カイト

「ライディン！！」

カノンノ

「ライトニング！！」

2つの雷が俺の剣を纏う・・・そして腰を低くし、剣を裏手に持ち替え、構える。

そしてガルーダは3体で突進してくる。

カイト

「くらえ！！ライディンストラッシュ！！」

横に大きく伸びる衝撃波が現れ、ガルーダを飲み干した。

カイト

「やった・・のか・・・」

カノンノ

「おめでとう。これであなたも私たちアドリビトムの一員よ。」

カイト

「い、い・・・いやったぁ〜〜!!」

第1話：試験（後書き）

すみません。手違いで第1話がどっかに飛びました・・・

第2話：絵

三人称ｓｉｄｅ

カイト
「魔神剣・双牙！！」

カノンノ
「グレイブ！！」

エミル
「穿孔破！！」

マルタ
「フォトン！！」

ここはコンフェイト大森林・・・プチプリ１０体の討伐依頼を受け、ここにきた訳だ・・・ちなみに今１０匹目を倒したところだ。

マルタ
「それにしても2人は息がぴったりだよね～」

エミル
「うん。こんなに息が合うなんてすごいよ。」

カイトがアドリビトムに入ってすでに半月がたった。いまではよくこの４人でクエストに行く機会が多い・・・なかでも、カイトと

カノンノのコンビは流れるような連携をとるほどだ。もちろん、エミルとマルタのコンビもすごい連携だ。だからこの４人でチームを組んでいるというわけだ。

カイト
「何行ってんだよ。２人の愛の連携にはかなわないよ。」

カノンノ
「本当。お似合いだよね。」

マルタ
「でしょ～。やっぱり私はエミルと・・・／／／」

エミル
「ちょっとマルタ!?何いってんのさ!!あ～もう、早く帰ろう。」

マルタ
「あ～ちょっと～エミル～～」

追いかけていくマルタを見てカイトとカノンノは微笑んだ。

アドリビトム　展望台

カイト

「ん～・・・・・」

カノンノ
「どう？カイト。」

カイトは今カノンノが書いた絵を見ている。

カイト
「・・・やっぱりどこかで見たことはあるんだけど・・・それがどこがまではわからないなぁ～」

カノンノ
「そう。」

カイト
「ごめんな。力になれなくて。」

カノンノ
「ううん。それはこっちのセリフだよ。」

カイト
「え？」

カノンノ
「私の絵で、カイトの記憶が戻ったらって思ってるの・・・だから・・・」

カイト
「・・・ありがとう。カノンノ。」

カノンノ
「どういたしまして。」

そんな2人に水を差すかのようにあの2人がやってきた。

エミル
「カイト！！ひと勝負やるぜぇ！！」

カイト
「エミル！？つかなんでラタトスクモードなんだよ！！」

マルタ
「エミル～がんばって～」

カノンノ
「ねぇマルタ・・・何があったの？」

マルタ
「え？エミルが水と間違えて酒を飲んだところに、カイトって強いよね～って言ったら、『俺がカイトをぶっつぶす！！』ってなったんだけどいまいちよく分かんなくて。」

カイト&カノンノ
「「（（（絶対それが原因で普段のエミルが落ちたんだ））））」

カイト
「っちしょうがねえ！！やるしかねえか。」

エミル
「行くぜ！！カイト！！」

カイト
「きやがれ！！エミル！！」

2人はほぼ同時に駆け抜けた、しかし技は使わずに単純な剣術と体術で勝負している。お互い一歩も引かない。先に動いたのはエミルだ。

エミル
「崩蹴脚！！」

カイト
「っち。烈破掌！！」

空中に飛んで蹴りを繰り出したエミルに、カイトは剣を持っていない左手でエミルの足に合わせるように突いた。

エミル
「瞬連刃！！雷神烈光刹！！」

素早い3連撃から斬り下ろし、連撃で相手を攻撃し斬撃と共に素早く相手の背中に回り込んだ。

だがカイトはこれを剣で受け流すようにすべて耐えた。

カイト
「次は俺の番だ！！魔神剣！！魔神剣・双牙！！魔神連牙斬！！」

カイトは計7発の衝撃波を打ち込んだ。それをすべてかわしたエミルだったが、

カイト
「イオラ！！」

エミルを中心に小さな爆発が数多く起こった。

これをエミルは前転でやり過ごす。

エミル
「魔神剣！！」

カイト
「魔神剣！！」

お互いに放った衝撃波が交わり、相殺する・・・時間にして1秒にも満たない間にエミルはカイトへと迫った。

エミル
「鳳翼旋！！秋沙雨！！虎咬裂斬刺！！」

カイト
「何！？グアァ！！」

前方に跳躍しつつ2度斬り上げ、連続で突き、切り上げながら自分も跳躍する。そして回転斬りで上昇しながら最後に衝撃波を放った。

カイトははるか向こうへと吹き飛ばされた。

エミル
「獣招来！！」

マルタ
「ちょっとエミル！！勝負はついたじゃない！！」

エミル
「何いってやがる・・・まだ勝負はついてねえぞ。」

マルタ
「え？」

見るとそこには多少傷がついているものの、まだピンピンしているカイトが立っていた。

カノンノ
「カイト！！」

カイト
「いって～な。まさか相殺した後すぐにくるとは思ってなかったぜ！！」

エミル
「フン。まだ行くぜ！！魔王地顎陣！！」

カイト
「甘え！！蒼龍滅牙斬！！」

エミル

「なに！？これを相殺しただと！？」

カイト
「どこ見てんだよ。」

エミル
「！！」

カイトはエミルの懐に入った。そこで流れるよな連続コンボを叩き込んだ。

カイト
「瞬辻剣！！雷神剣！！風雷神剣！！爪竜連牙斬！！」

疾風のように突き、さらに突き雷を落とす、前の２つの複合技を繰り出し、さらに剣と拳や足を交互に使って切り、叩きつけていく。そして最後に巨大な真空波で切り刻んだ。

カイト
「幻魔衝裂破！！」

先ほどカイトが吹き飛んだように、エミルもとんだ。

だがエミルはすぐに立ち上がった。

エミル
「俺は負けるわけにはいかない！！ウオォオオオ！！」

瞬間エミルの周りに様々の色の光の円が現れる。オーバーリミッツだ。

カイト
「上等！！かかってきやがれ！！」

エミル
「空牙衝！！雷神烈光刹！！」

跳躍して斜め下に針の様な衝撃波を何本も同時に放ち、連撃で相手を攻撃し斬撃と共にカイトの背中に回りこんだ。すべてを受け流したカイトだが

カイト
「（まずい。喰らう！！）」

獣招来でスピードが上がったエミルにはここまでが限界だった。

エミル
「魔王獄炎波！！この一撃で・・・沈め！！」

カイト
「グアアァァァアアア！！」

カイトは滅多切りにされ後ろの回りこまれ湧き上る炎に飲まれた。

カイト
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

エミル
「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

カイト
「これで決めてやる！！煌け！！龍の力よ！！」
カイトもオーバーリミッツで対抗する。その時、彼の右手の甲に竜の顔のような紋章が浮かび上がった
カイト
「これが俺の秘奥義の１つだ！！ライディン！！」
カイトの剣に雷が降り注いだそしてその帯電している刀を鞘に収めた。
エミル
「なにをしている？」
カイト
「それはお楽しみってことで・・・お互いこれで最後にしようぜ。」
エミル
「ああ。」
エミルは剣を裏手にもち、静かに腰を落とした。そして闇のオーラを剣に収束させていく。
カイト
「（４・・・３・・・２・・・１・・・）！！」
勢いよく剣を抜いた、その剣は雷の力がよりいっそう高まっていた。そして剣を裏手に持ち替え、気を高めていく。

エミル
「これで終わりだ!!アイン・ソフ・アウル!!」

カイト
「集え雷の力!!限界突破の矛となれ!!ギガストラッシュ!!」

光と雷の衝撃波がぶつかった、威力は互角。次の瞬間、大きな爆発と共に2つの衝撃波が弾けとんだ。

マルタ
「・・・引き分けだね。」

カノンノ
「・・・うん。」

船の両端には爆発で吹き飛ばされた2人がいた。

カイト
「う・・・っく。」

エミル
「う・・・ん・・・・あれ?ここは。」

マルタ
「エ〜ミ〜ル〜〜?」

エミル
「え?どうしたの?マルタ。そんな怖い顔して・・・」

マルタ
「君のせいで大変だったんだからね！！」

エミル
「え？え？？」

カイト
「ちょ・・・マルタ、落ち着け。エミルも悪気があったわけじゃねぇし。」

マルタ
「フォトン！！」

カイト
「っぐ。」

マルタ
「さぁはやくきなさい。ちょっと話があるの。」

エミル
「ちょ？マルタ。やめ、うわぁぁああ・・・・」

カイト&カノンノ
「「・・・・・・・」」

しかし・・・カイトの紋章は勝負が終わったときには消えていた。

紋章が浮かびあがっていたことはカイトを含め、だれもわからない・・・

第3話：光（前書き）

あけましておめでとうございます。

第3話：光

カイトside

カイト
「え？村人の護衛？」

カノンノ
「うん。いいかな・・・」

カイト
「ああ。もちろん。」

カノンノ
「ありがとう。」

カイト
「場所は？」

カノンノ
「ルバーブ連山だよ。」

カイト

「それじゃあ３０分後に出発でいいか？さっき依頼から帰ったばっかりで、準備できてないんだ。」

カノンノ
「わかった。３０分後ね。」

俺は自室へと戻り、名前を知らない剣を手に取った。その剣は柄頭には小さな赤い宝玉の回りを囲むように白い金属・・・オリハルコンで覆われている。握りは茶色の皮を螺旋状に巻き上げている。鍔はまるで竜の翼のように、対になっている白い金属を支えるかのように中央に赤い宝玉が輝いている。刀身は反りのない、真っ直ぐな剣で両刃。血溝は鮮やかな淡い蒼色をしている。

カイト
「・・・護衛って難しい仕事をさせるよな。あいつ・・・」

そしてボックスの中からアップルグミ、スペクタクルス、オレンジグミを６つずつ取り出し、ホールへと向かった。

ホールにはもうすでにカノンノがいて、俺を待っている様子だった。

カイト
「悪い。遅くなった。行こうぜ？」

カノンノ
「うん。」

数時間後

カノンノ
「今回の仕事はこれで終わりよ。船に帰ろう？」

カイト
「なんか物足りないな・・・」

カノンノ
「しょうがないよ。護衛ってほとんど魔物が襲ってきた場合のみに対処するような仕事だから・・・」

そのとき大きな光の塊が俺たちの頭上を通過して行った。

カノンノ
「何だろう・・・」

カイト
「あれは・・・」

俺は考えるよりも先に走り出していた。その光に向かって。

カノンノ
「カイト！！・・・・迎えが来るまで時間がある・・・追いかけよう。」

カノンノ
「何・・・光・・・・？」

カイト
「・・・人だ。空から人が・・・・・って俺もか。」

その人はゆっくりと降りてきた・・・・・

数分後

すぐに光の中にいた少年は目を覚ました。

カノンノ

「気が付いて良かった。空から光と一緒に降りて来たんだもん。すっごく驚いたよ！あれは、何かの魔術なの？」

？？？

「魔術？」

カイト

「覚えてないのか？俺と一緒だなぁ・・・」

俺は自分に言い聞かせた。

カイト

「お前空から落ち・・・じゃなかった。空から降りてきたんだぜ？」

？？？

「空・・・から？本当に？」

こりゃあマジだな。

カイト
「自己紹介がまだだったな。俺はカイト・バナージ。こう見えて記憶喪失なんだぜ。」

カノンノ
「自慢になってないよ。あ、私はカノンノ・グラスバレー。よろしく。」

シュウ
「僕はシュウ、シュウ・コードウェル。」

カノンノ
「シュウ・・・いい名前だね。」

さて自己紹介がすんだところで

カイト
「うし。山を降りるとするか。」

カノンノ
「え？もう？」

カイト
「ここにいると危険だろ？もしものときを考えて早く降りよう。」

カノンノ
「うん。そうしようか。」

おっと・・・忘れるところだった。

カイト
「シュウも来いよ。」

シュウ
「え？」

カイト
「いいから。どうせ俺みたいに行く当てがないんだろ？それにお前とは始めてあった気がしないしさ。」

シュウ
「うん・・・ありがとう。」

カイト「
いいって。いいって。」

山を下ろうかとしたその時・・・・

???
「グワァァアア!!」

カイト
「あいつは!?」

俺が問うたのと同時にみんなが上を見る。そこには大きな竜がいた。

カノンノ
「ワイバーン!!」

シュウ
「なに?あれ・・・」

っち。やるしかねえ!!

次回「竜を討伐せよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9968z/

テイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー３　～龍は閃光のように

2012年1月1日01時45分発行